



TITLE:

<批評・紹介>今堀誠二著「東洋社會經濟史序説」

AUTHOR(S):

近藤, 秀樹

CITATION:

近藤, 秀樹. <批評・紹介>今堀誠二著「東洋社會經濟史序説」. 東洋史研究 1964, 22(4): 511-519

ISSUE DATE:

1964-03-31

URL:

<https://doi.org/10.14989/152649>

RIGHT:

たが、これは諸坊の隅角に防火用の望樓をつくりこれを中心とした消火區域が行政区劃に發展して廂に代つたものと考えられ、そののち主として南方各地に行われたのである。

以上は本書の内容のきわめて粗雑な紹介であつて、あるいは著者の眞意を誤つて傳へ、重要な點を見のがしたことも少くないかと思う。もしそうであれば、これはひとえにわたくしの能力が不十分なためであつて、著者ばかりではなく讀者にも深くおわびしなければならぬ。終りに讀了した結果、心に残つたことを少しばかりあげて著者の教えを仰ぎたいと思う。例えば、日本の條里制は明らかに中國になつたもので、古代中國には阡陌の制度が行われていたのであるが、日本の條里集落のようなものがはたして中國にもあつたかどうか。なかつたという説もあるが、それでよいのか。また新しいところでは、社會學的、地理學的に調査された現實の集落からさかのぼつて、その歴史的變遷や地方的特徴をしらべる考慮も必要ではないか、といった問題である。もちろん、これらはわたくしども後學に課せられた問題でもあつて、本書をこそ手がかりとして研究を進めて行かねばならないのである。

(日比野丈夫)

東洋社會經濟史序説

今堀誠二著

昭和三十八年九月 京都 柳原書店
A5判 二〇二頁

東洋の社會經濟史を概括的にとりあつた書物が、學界に提示

されたのは久しぶりのことである。編集委員會がこの書物の批評・紹介をわたくしに依頼されたのは、數年前に明清時代の社會經濟史研究の動向をまとめたさいに、わたくしが本書の著者今堀誠二氏の「共同體」論に言及したことがあり(本誌二〇ノ一)、また最近はわたくし自身が土地問題研究へ接近する最初の試みとして范仲淹設置の義莊の變遷をたどつたさいに、ふたたび宋代いごの共同體について愚見をのべたことから(本誌二二の四)、中國における共同體轉變の總括的敘述を中心とする本書によつて、わたくしの共同體論への關心をさらに啓發してやろう、との親切によるものである。

今堀氏は中國の共同體研究においてつとに著名であるが、氏の共同體研究への確信が日中戰爭中の中國留學當時における、かの地での體験にふかく根ざしていることを氏は序文で回顧的に明かにされている。

本書は中國の共同體論においてすでに先驅的業績を世に問われてきた今堀氏が、今度補訂された既發表の論文六篇と新たに書き加えられた二篇をそれぞれ一章とし、全八章を一書にまとめたものである。通讀してみてもこの八章は三部に分かれたれているといつてよいと思う。第一、二章が冒頭部で、著者は第一章アジア研究史において「アジアとは何か」と設問され、フランス啓蒙思想家からマックス・ウェーバーに至る諸學説を批判されたのち、この疑問をひきついで、第二章アジア史の基本問題において著者みずからの基本課題を設定される。第二部は第三、四、五の三章で、ここで著者は第一章村落「共同體」において秦漢から清朝までつづいた中華帝國二千年の社會基盤としての村落共同體の展開諸段階を(一)氏族共同體

→(二)古代的村落共同體→(三)封建的村落共同體→(四)村落共同體の解體、と段階をおって敘述し、第四章中世社會の構造と權力において(四)の段階を、第五章東洋の生産と資本主義において(四)の段階をそれぞれ獨立した各章として敘述し補強される。共同體の解體過程は同時に資本主義生産様式の胚胎・發展の過程でもある。最後の第三部では第六章ギルドシステム、第七章ジャーニーマンギルド、第八章近代資本主義と合夥の各章において、封建的村落共同體とならんで中國封建社會の基盤をなしたギルドの分析と、その解體過程に登場するジャーニーマン(職人)ギルドの分析がおこなわれ、そしておそらくは中國における原蓄過程の分析を意識して最終の章で合夥がとりあげられている。このように見えてくるとき本書の構成は、きわめて總括的にして論理的である點がまず注目されよう。ところでわたくしは著者がアジア史研究の基本課題を説いた第一部の検討をあとまわしにして、早速、本書の論理的根幹部分をなす第二部の紹介に入りたいと思う。

著者によつて指摘される村落共同體の發展各段階の諸特徴と、當該段階が世界史の發展段階に占める位置づけとはつぎのごとくである(以下のまとは主として第三章によるが、第四、五章から援用するときには頁數を註記する)。

一、氏族(邑)共同體段階Ⅱ殷周時代(古代前期——九二頁)

この時代、諸侯(種族)が土地の所有者であつた。種族が基盤にしていたと考えられる氏族共同體は「邑(居住地)」を中心として一定規模の耕作地をもち、農耕作業も氏族が共同で行なつていた。」また「氏族は耕地の外に牧獵地・田獵地をもつており、牧畜・狩獵も氏族が共同で營んだ。」

邑共同體は「アジア的共同體に比較することが有益である」が、共同體による土地共有、家族にたいする土地分配のさいにおける質的平等の原則の點では兩者「相似た條件にあつた」とはいえ、邑共同體では「勞働要具の私的所有、ヘレディウム(家族により永續的に私的占取される宅地・庭畑地)の存在、分有地の獨立性などがすべて明かでなく……原始共同體に近いのではないかと疑われる。」

二、古代的村落(里)共同體段階Ⅱ春秋戰國—隋唐(古代後期——九二頁)

春秋戰國時代が里共同體成立への過渡期である。春秋いご鐵器の利用による新農耕地(公田)が開墾されたが「戰國の七雄など専制君主の私有地となつたので、山林薮澤の一半は氏族の所有から君主の家庭に移された。」一方鐵製農具、牛耕、犁の普及による「新しい生産力は邑共同體の解體を促し、直接生産者は相對的に解放されていった。」かくして氏族共同體のうえに立つた周にかわつて「渠道の開発に最も努力した秦が最初の中華帝國を作り」、「これと共に中國全體が村落共同體の段階に移行した。」

里は原則として四圍に土壁をめぐらす集村で、「社」を中心とする祭祀共同體でもあるが、「ほとんど自給自足が可能なほど經濟圏としても高度なまとまりをみせている。」里共同體は「『大家族』になぞらえた社會態制によつて規制され」た家の集合體で、土豪・豪俠・豪族などといわれた大土地所有者「父老」が里の指導層として佃客(小作人)・小農民などの「子弟」層に家父長的專制權力をふるつていた。そこでは「村民の生活を保證するたてまえをとつていた」ので、井田制説に假託されたごとく「村落の土地利用におい

て村民に平等な權利を與えていた。」

里を細胞として成立した國家權力が「全農民に對して土地の平等な利用を約束」する法的根據である「律令體制は秦漢にはじまり、①過大な土地所有によつて共同體を破壊しないように父老を指導すること（前漢の限田、新の王田、晉の占田など）、②最低生活を保障する土地を子弟農民に給與すること（漢の公田、魏の屯田、晉の課田、南朝の公田など）を眼目としていたが「均田制は右の①と②の要求を一本化した土地政策の決定版」で、里共同體は隋唐において國家的規模で形を整えた。

里共同體と古典古代的（*ギンヤコノ*）共同體と比較してみると「全體として、土地の共同體的支配が優越しながら、氏族から家族への推移の中で、ヘレディウムの確立をみたわけで、兩者ともアジア的共同體と相違して」類似點は多い。しかし中國では家父長制大家族であるのにたいしてローマでは單婚家族が基本となっている點、里共同體では「アジア的農業（專制的家父長への家族の奴隸服従によつて支えられる大家族制）家族共同體による、勞働の生産性を考えず、勞働力の消耗をいとわない集約農法——八四〇九〇頁）の關係から勞働の生産性を高めるため、共同勞働を採り得なかつた」（原意不明）點など「共同體として成熟しきらない點が多く……里共同體をいきなり古典古代的（*ギンヤコノ*）共同體として取扱ふことには慎重を期すべきである。」

三、封建的村落（社）共同體段階——安史の亂（元末（前期封建社會——七五頁）

安史の亂を境に「（古代的）村落共同體は農民に土地配分を行ふことができなくなり、急速に解體過程に入った。」その結果、農民はヘレディウム（すなわち均田制下の園宅地・戸内永業田）を私有

化することにより自主性を高めた。一方、軍閥・官僚・商人・形勢戸は「豪族の所有地・里共同體の共有地（口分田）・山川藪澤などを手に入れ」大土地所有者として擡頭し、新しい開墾に着手した。「口分田を失つた小農民は私有地以外に地主の小作人（佃戸）となつて經營面積を維持することに努めたが、私有地を失つて純粹の小作農となる者も生れた。地主と佃戸が封建領主と農奴の關係（主従の分）において定着する時、封建社會の成立となる。」

封建的村落共同體は、最初私有地を守りながら佃戸としての地位を安定させるための私的保障機構をもとめる農民の要求と、農村の秩序と安全を維持し、封建地代の徴收をはじめ農地開發において農民を協力させるために小農民・佃戸支配機構をもとめる地主の要求とが結實して成立したものであった。これは一面において祭祀共同體でもあり、同族關係をテコとする血縁共同體を擬制しているばかりもあるが、中唐いごかなり一般化した莊園制をとつたばかりでも、そうでなかつたばかりでも、いずれも古代國家の支配權を押しつけて成立したもので、北宋の過渡期をへて南宋に入るとその自主性は明白になる。私的保障機構として出發した封建的村落共同體は共有財産（共有地）放牧地・山林・草刈山・採土地・墓地、水利施設（池塘・堤防・渠道）を外にたいしては排他的、内にたいしては平等に利用し、農民の再生産を可能ならしめる場を確立したときに、村落共同體としての内容を備えるに至る。ただ「封建社會になつてから、家族の自主性は高まつたが、家が家父長專制の大家族であることに變りはなかつた。」この點は「古代的要素を溫存していた」のであつて「宋以後の中華帝國にあつては、古代制度文物が封建體制のなかに癒着していたとみるのが至當である。」家族勞働に

よる莫大な勞働力の投入によって土地の生産性は高まったが、勞働の生産性は古代に比してさしたる變化はなかった。そのため「剩餘生産を吸いあげるうえでは限度があり、村落共同體のうえに封建的なヒエラルキーをそびえ立たせることは不可能で……ヨーロッパの封建制度が知行制を伴った階層制をうちたてたのに對し、中國では軍人に土地と農民を與えて從土制を採る餘裕はなかった。」

封建的村落(社) 共同體をゲルマン的共同體に比較してみると、後者が自主性の著しく進展した私的土地所有者(自立的農民)が自主的に連合を作ることによって成立していたのに比して、前者では「小農民の自主性が高まった點は相似しており、家が共同體を作る點も共通しているが、」 「共同體はもはや私的個人(家)をおしつむ結合體としてではなく、人間の單なる結合關係として現われている」と表現されるほどに農民の自主性は確立していなかった。その差違はゲルマン的共同體が共同體成員に十分に平等に配分できる共同體用地(「耕區」)を總有したのにたいして、封建的村落(社)共同體が村民の個々人の生活に資するだけの廣さをもつ共同體用地をもつばあいが多く、またそれがあつたばあいでも個々の村民がなんらの持分を有しない國體所有權のもとにあつた差違において明白である。

總じてゲルマン的共同體に比して「社共同體の後進性が認められるようである。」

四、村落共同體の解體——元末—中華人民共和國(後期封建社會—絕對主義——七五頁)

「村落共同體は商品經濟の浸透につれて解體していく」のであるが、「明以後は農產物でも小商品生産の發達が著しく、木棉栽培が

普及し、農村工業としての棉業の發達がみられた。絹織物については、マニユファクチュアが成立していたのではないかと考えられる。」商品經濟進展下の共同體の變革についていえば「元末の大規模な農民反亂により莊園制は瓦解し、明朝は村落共同體による封建體制の再編成に努力して後期封建社會の確立に成功した。」(九一頁)「新しい村落共同體は土地所有者だけで構成され、その發言權は所有地の大小に比例するという形になったので、形式的にはすべての土地所有者に權利を與えて、共同體の面目を整えながら、實質的には大土地所有者の專制支配のための體制になつてしまつた。」(九二—九三頁)「明清の共同體を特色づけるものは、共同體の中に共同體を破壊していく力が生れていたことである。」「明清時代の共同體は」隷農とよばるべき農民によつて組織され、地主と佃戸の間に主従の分がなく、長幼の序があるにすぎないとされていた」

が、村落共同體は「自らの矛盾のなかで、地主と農民の對抗關係を發展させ、地主共同體と農民共同體(太平社・平安社などと呼ばれた農民國體)の複合社會となり、さらに村落が農民共同體に轉化する場合さえ少くなかつた。」鄧茂七や李自成の亂、抗租運動から太平天國に至る農民戰爭は、かかる傾向をおびた政治闘争である。

「農民がなしくずしに押していた狀態に對して、地主・商人側の反撃はきびしく、とくに嘉慶年間を境として、在城地主の反動攻勢が激化し」(九八頁)「地主が共同體におけるヘゲモニーをとりかえたために、村落共同體は反動的な支配國體としての性格を強めた。中國の反動化がアヘン戰爭の勃發を導き、つづいて太平天國の敗退となつたので、村落共同體は植民地資本主義の波に洗われながら、寄生地主制のとりでとして再構成される方向に進んでいった。」

地主支配の強化により共同體の矛盾は深刻さを増した。」「辛亥革命というのは在城地主の打倒に立ちあがった在郷地主と農民の連合軍の勝利であった。後期封建制は倒れて絶対主義がこれに代ったわけである。」(九八頁)

中華民國は半封建的・半植民地社會の段階にあるといわれているが、村落共同體は半壞狀態のまま温存された。寄生地主・軍閥はもちろん「蒋介石氏さえ共同體を中國の傳統だと稱して、その擁護につとめた。……彭湃・毛澤東兩氏などが農民組合の結成に乗りだし、地主共同體を倒すために土地改革をとりあげた。その際村落共有地(義田など)もすべて農民に配分したため、共同體は致命的な打撃をうけることになった。……(一九四九年成立の)新政府は專制王朝が倒れた後も命脈を維持していた地主制度と家父長制家族を解體するために、すべての老若男女に對して平等に人權と經濟力を與え(土地法・婚姻法)、人民公社を通じてアジア的農業に終止符をうった。……共同體は存在の餘地を完全に失い、長い歴史を終えることになったのである。」

「ヨーロッパでは村落共同體は封建制が倒れた後、資本主義と對決することになるが、中國では全く異なつた道を歩んだ。」

以上が今堀誠二氏によって提示される、中國における「共同體」の歴史である。できるだけ氏の敘述がふくむ論理展開を忠實に紹介しようと思がけたが、やや煩瑣になるのをいとわなかったのは、共同體論という高度に抽象的な理論を検討するにあたり、それが適用される諸史實との接觸點をぬきにしてはならないと考えたからである。ただ、わたくしはここで氏によって指摘された(あるいは指摘されなかった)諸史實と氏の適用された理論との接觸點が、理論的

操作の手續きにおいて飛躍をゆるしていないかどうか、の個々の検討にはたち入るまい。中國二千年の豊富な諸史實をまねにして、わたくしは到底それをなし得る能力を持ちあわせていないからであるが、また、そこにたち入るに先立つて氏の「共同體」理論そのものを検討する必要がある、と考えるからである。

共同體論はマルクスのいわゆる「アジア的生産様式」に關連して一つの歴史をもつ。アジア的生産様式を東洋社會獨自の社會構成とみるか、あるいは奴隸制・封建制・資本制という世界史の繼起的な發展段階のいずれかに關係づけて考えるか、をめぐって戦前に論争があつたことは周知のことである。なかでも前者の見解にたつたウィットフーゲルの研究が想起される。一九四九年の中華人民共和國の成立は、中國社會を停滯性の理論をもつてとらえ、歐米とそれに日本をも加えての外部からの資本主義勢力の影響をもつてしか變革し得ないとする發展外因論を冷厳な事實をもつて破産せしめた。

その後、ウィットフーゲルの研究がわが國において大きな影響力をもち多くの追隨者を生んだのは、結局のところ「日本における中國研究者の大部分は、それが意識的であると否とを問わず、明治維新以降到達したわが國の近代國家的外貌と資本主義の高みから、これとの比較において、中國社會とその歴史を見るという點において、共通した視角をもっていたから」と反省され、かかる視角の否定にたつて「中國史自體のなかに發展と變革の主體的な契機を求めて行こうとする困難なところみが、要請されてくることになる」とされている(増淵龍夫氏「日本における東洋社會經濟史學(上)」(弘文堂・一九六〇・『社會經濟史大系』X所收)。

一方、時をおなじくしてマルクスの遺稿『資本制生産に先行する

諸形態」が刊行（邦譯は一九四九）され、その解釋をめぐって共同體論は理論としても再検討されてきている。そのうち共同體發展の歴史を基本諸形態すなわちアジア的→古典古代的→ゲルマン的（封建的）共同體の繼起的發展と理解した、大塚久雄氏『共同體の基礎理論』（岩波・一九五五）が、これまでの代表的業績といえるであろう。（大塚氏の『基礎理論』にたいしては、マルクスの『諸形態』を共同體の理論としてではなく、所有の理論として理解する、藤原浩氏「『ゲルマン的共同體』とは何か」（岩波『思想』五七年一月）をはじめとする批判があるが、ここではさしあたり、それについてはふれない。）

以上のべた共同體論の歴史を視野のうちにふくめば、その後の増淵龍夫氏や仁井田陞氏などの個別實證的研究の成果をとり入れた今度の今堀氏の著書がしめる、あるいはしめねばならぬ學說史的位置がほぼ明らかになる。停滞性・外因發展論の克服のための新たな問題設定、それに導かれる中國社會の發展裂機の檢證、それが學說史的には今堀氏に課せられた課題であった。

これらのことを念頭において、今堀氏の「共同體」論を檢討するとき、まず指摘されねばならないのは、今堀氏が指定される「共同體」範疇の曖昧さであろう。氏が中國の「共同體」の繼起的發展をたどられるとき、その指標を氏によって世界史的發展として横目で見えられた大塚氏『基礎理論』の共同體諸段階のそれに據っておられることはさきに紹介したごとくである。ところで大塚氏は繼起する共同體の三つの基本形態は「形態と構造を相互に異にしているとはいえ、すべて『共同體』である以上、いずれも『土地』の『共同體的占取』の土臺の上に打ち立てられており、したがって何らか

の形で『共同地』（『共同マルク』）と『共同體規制』をとともなうて現われるという點では、もちろん三者共通の特徴を具えている（上掲書三六頁）と、共同體構成の不可缺條件を前提され、この前提にたつて各段階の基本的な諸特徴が理論的に標示されている。しかるにこれらの諸特徴を指標にたどられる今堀氏の「共同體」論にあっては、とりあげられる「共同體」がすでに大塚氏の論理前提の枠をしばしば逸脱する。例えば今堀氏は村落共同體の繼起的發展諸段階のなかにアジア的共同體の段階を指定されないが、今堀氏によってアジア的共同體は、專制的家父長に奴隸的に服従することによって支えられた大家族制を指すものとして理解されている（第五章、三、アジア的共同體）。そして大家族制＝アジア的共同體が共同體の廢絶に至るまで強固に残存したことが、中國史を特色づけるものとして強調されているが、このアジア的共同體と土地所有の關係はどうであるのか。要するに貧困をカバーすることができた（二五頁）ためにとられたとするアジア的共同體は、むしろ土地を所有しない直接生産者（氏のいわれる里共同體の「子弟」層、社共同體の佃戸）によってこそ保守されたのではなかったのであらうか。また、封建的村落共同體の解體期にとりあげられる「農民共同體」がそうである。「地代の引下げを要求し、一五世紀以來、何回も農民暴動を起した」（九三頁）農民によって「村落が農民共同體に轉化する場合さえ少くなかった」（五九頁）といわれるとき、農民のヘゲモニー下にあった村落の土地は、誰れによって所有されていたのか。「中國の共同體がマルクスの規定した意味での共同體と、必ずしも一致しない」（六〇頁註）と考えられる今堀氏は、「本書では表現を簡單にするために（共同體の三字に冠すべき）カッコを省略」（同

上)されたが、そのために起っている混亂は、表現上の混亂をのり越えている。解體期の村落『共同體』は地主『共同體』と農民『共同體』の複合社會で、かつ古代的遺制としての大家族制Ⅱアジア的『共同體』が愈着しているという、三重の『共同體』のなかで、基本的なものは何なのか。總じて各共同體内における土地の所有關係を捨象することにより、共同體内における土地の所有者と直接耕作者の關係すなわち階級關係を捨象してすめられる今堀氏の『共同體』論は、ついには氏のいわれる中世社會に「官僚共同體」を出現させたりする(六八頁)。その結果、今堀氏によっても承認される「資本主義生産様式の發生という變革點を境界としてそれ以前の生産様式は、それぞれの特殊性はあるにせよ、いずれも根底において『共同體』として編制され、その上に打ちたてられていたのに對して、それ以後の生産諸様式はそうした『共同體』的構成を全く缺いているという決定的な相異を兩者の間に見出す」(前掲書三頁)とする大塚久雄氏の認識をのり越えてしまっている。

つぎに指摘されねばならないのは、階級關係を捨象したことによる當然の歸結として、村落共同體發展の內在的契機が捨象されていることであろう。「共同體の中に共同體を破壊していく力が生れてゐたこと」はけつして「明清の共同體を特色づける」(前引)ものではないはずである。「共同體が舊來の様式そのままで存続するためには、その成員を、まゑもつてあたえられた客觀的條件のもとで再生産することが、必要である。生産そのものと人口の増進(この増進も生産のうちにはいる)は、必然的に、つぎつぎに、これらの條件を止揚する。すなわち、その條件を再生産するかわりに、破壊する、等々。しかも、こうして、共同團體は、その基礎となつていた

所有關係とともに、消滅してゆくのである」(マルクス「諸形態」手島譯二六頁)。ここに指摘されている辨證法的發展こそが『共同體』にとつても繼起的發展の内容でなければならぬはずである。技術的發展・品種改良による江南の水田造成を「産業構造の變化」としてとらえ、古代→封建的村落共同體發展の「大きな役割」に見たてたり(五二頁)、村落共同體の解體を「商品經濟の浸透」によつてとらえ、これらの諸現象を推進した主體Ⅱ農民を缺落するのは、階級關係を捨象した結果、各段階の『共同體』における基本的階級矛盾を捨象した、今堀氏の「共同體」論の論理的歸着である。この缺陷はとりわけ端的に今堀氏の中國近代史理解にあらわれる。中國近代史の序幕であるアヘン戰爭は、「中國の反動化が導いた」もの(前引)との理解もさることながら、中國近代の農民が現實の課題とした反帝・反封建、とりわけ反帝の要求が社會經濟史的にいかなる現實を背景に出てきたのか、はついに言及されていない。半壞狀態にあつたとされる村落『共同體』は、帝國主義諸國の侵略下にあつて、なんらの變容をこゝむることなく、農民はその『共同體』のなかに封鎖されたままとする。蔣介石氏はこの共同體を擁護し、彭湃・毛澤東兩氏などは共同體を終焉に導いた、といわれるが、蔣介石の存在じしんは村落『共同體』内の矛盾とは無縁の存在だったのか。毛澤東の存在じしんが村落『共同體』内の基本的階級矛盾そのものから產出された存在ではなかったのか。逆にいえば、『共同體』はいつも救世主を待ちのぞむだけの存在だったのか。『共同體』内の發展契機が捨象されている今堀氏の「共同體」論は、形を變えた共同體「外因發展」論といわれてもやむを得まい。

最後に、今堀氏は村落共同體發展の諸段階を世界史に位置づけた

結果、氏族(邑)共同體Ⅱアジア的共同體に比して未成熟、古代的村落(里)共同體Ⅲ古典古代的(古典古代的)共同體に比して共同體(?)として未成熟、封建的村落(社)共同體Ⅳゲルマン的共同體に比して後進的、とされているのはさきに紹介したごとくである。停滞性理論をようやく事實をもって克服した中國社會は、今度は「共同體」の理論家今堀氏によって未成熟・後進性のワナにかけられることになった。しかし果して後進的なのは、中國社會であろうか、それとも論者であろうか。この點は最初にもちこした本書第一部において今堀氏が設定されたアジア史研究の基本課題を検討することによって明らかとなろう。

今堀氏は第二章アジア史の基本問題において、一九六〇年經濟企畫廳の國民所得白書の分析にたつて、「アジアは國家として持てる國であるが、國民としては持たざる國となつて、世界の底邊を低迷している。それはなぜであろうか。」と問いかけられる。そしてその根本原因が、「働けば働くほど、自らの人間生活が豊かになるような客觀的條件を設定してきた」ヨーロッパ人に比して、アジアでは人間性を無視した、すなわち奴隸的勞働にささえられる家族主義的小經營がいままで強固に残っていたことにあつた、とされる。そして、それにもかかわらず、非人間的な生産關係の克服、新しい生産力の創出、ヒューマンイズムの尊重、民主的人間關係の醸成に向つてはらつたアジア人の努力のあとづけが、アジア史研究の基本課題だとされるのであるが、所詮あと馬は、あと馬である。今堀氏の東洋社會經濟史は、いち早く共同體を廢絶して資本制社會を成立せしめたヨーロッパの社會經濟からの後進性の度合において測られることになるわけである。

しかし、激動する世界的現實——アジア植民地諸國、アフリカ植民地諸國、ラテン・アメリカ植民地諸國の獨立・解放闘争を眼前にしている今日において、アジア史研究の視角をヨーロッパ史からの後進性の度合を測ることに設定することは適切ではない。なぜならば、なるほどこれらの諸國はヨーロッパ資本主義諸國の水準に「追いつく」ことを目標にしてはいるが、それはただちに「資本主義化」を目ざしているのではないからである。その目標は「追いついて、追いこす」ことにある。アジア史とりわけ中國史研究の視角は、中國社會が二千年の歴史をたどってきた間つねにと馬であつたのかという歴史的檢討と、その他の新興獨立舊植民地諸國の歴史への理論的關心とをふくみながら、われわれの實踐的課題と關連して、かれらが現に目ざしそのためにたたかっている社會の高みから設定されねばならぬまい。東洋社會經濟史は西洋社會經濟史に追いつき、追いこさねばならない。

かかる視角を共同體論について設定するならば、それはマルクスが「ロシアの『農村共同體』は、近代社會がそれをめざしてすすんでいるところの經濟制度の直接の出發點となることができる。それは、まずはじめに自殺などしないでもうまれかわることができる。それは、資本主義生産が人類をゆたかにしたところの成果をば、資本主義制度を経過しなくても手に入れることができる。」(ヴェラ・ザスリッチへの手紙(草稿))『諸形態』附録・手島譯)と考えた視角を回復することである。そうしてこそはじめて中國社會經濟史は眞に停滞性を克服し、後進性から脱却できるであらう。

わたくしは先學の勞作にたいして過酷な批評をしたかもしれない。それが氏の理論にたいして建設的に對置さるべきものを缺いて

いるために、さらに過酷になったのではないかと恥じている。しかし、これもおそらくは氏もめざしておられるであろう日本の解放のために、われわれの學問を奉仕させたいと考えるならば、政治的行動の一致・統一を前提にしながら、そのためにこそ學問上の相互批判が必要である、と考えているからにはかならない。(近藤 秀樹)

Financial Administration

under the T'ang Dynasty

D. C. Twitchett

Cambridge University Press
London, 1963, pp. 374.

文化史にのみ關心を示してきた歐米のシノロジーム、最近では政治史・社會經濟史の分野に活躍の場を擴げ、水準以上の研究が發表されつつある。隋唐史の分野においても、三十年前に唐代經濟史に先驅者の業績を挙げたバラジュ氏は、十年前にも隨書の食貨志・刑法志の譯注・研究で優れた成果を残し、ブリーブランク氏は「安祿山反亂の背景」と題する一書を出版した。そして今、トゥイッチェット氏の大著「唐朝治下の財務行政」を親しく手にしうることになったのである。

本書の著者トゥイッチェット氏は、ロンドン大學東洋アフリカ學校 (School of Oriental and African Studies) の極東言語文化部門 (Department of the Languages and Cultures of the Far East) の教授。唐代の水利や范氏養食の研究で以前にも我が國に知られていた。この新著が出版されるにいたった経過と、この書の特

徴は、自序の中に簡潔に述べられている。

「この書は元來、一九五三年にケンブリッジ大學への博士論文として書かれた。出版のために改訂しようとして、全く新しい著作を書くか、或いは、幾つかを追加し、ごく最近の研究と初めののが完成して以後に出版された新しい文書類とに一致するように變更しつつその原型を遺すか、の二者擇一に直面した。時間に対する考慮は、私をして後者の道を取らせた。」學位論文は、序論と舊唐書食貨志の全譯に對する注釋であつた。この巻にその翻譯を含めることの困難さと費用とが、序論の部分だけを出版するように私を強いたのである。」この著作の大部分は、Balas 氏によつて既に研究された分野を包括している。バラジュ氏は一九三一年～三年に出版された 'Beiträge zur Wirtschaftsgeschichte der T'ang Zeit' という論文で、一般史の標準作と比較しうる水準で經濟史を扱つた西洋人のシノロジームの著作を初めて生み出した。かれの著作は中世中國社會の解釋に大きな前進を示した。しかしながら、とくに日本の中國學者による一から初期の業績はバラジュ氏によつて參考されていない。唐制の研究における過去三十年間になされた大きな前進を心にとめると、この大層重要な課題の新しい研究が決して蛇足ではない、と私は思う。三十年前にあまねく受け入れられた中世中國社會の描寫を總ての認識から變形させた日本人と中國人の學者たちの二世代にわたる勞苦に私が恩恵を蒙っているということを、讀者はすぐに認められるだらう。たとえこの書物が彼等の研究成果の幾つかを、西洋の讀者に紹介するにすぎないとしても、その有益な目的を滿たすことであらう。」

著者が自負するように、この書物の最大の特色は、日本人の研究